

妻の断捨離2

ちよっとちよっと、鉢取って！と言おうとしたら、妻が既にそれを手にして傍に来ていた。彼女自身で使おうとしていたのだから、そのあまりのタイミングの良さというのか気が利いているというのか。

そのちよっと前のことであった。

いつも座っている丸テーブルの席にまで冬の陽射しが届くようになって、すぐ脇の電源タップにも直射し、その覆いのために程良いサイズの薄い木の板を置いていた。

その板の表面が気にいらないので、何か表面に貼るものはないか？と言ったところ、妻は早速近くにある乱雑な棚から、これはどうかと、どこかの綺麗な包装紙を持ってきた。これがまたサイズぴったり。何でも有るのだな。

昨日も、こんなことがあった。

通販で購入した腰に良いという座布団。使い出して間もないが、どうやら長い時間の姿勢にも腰に負担が掛からなそうで良さそうだ。しかし、黒地のカバーが気に入らない。

そこへ、これ使えない？

昔毛糸で手編みした薄いベージュ色のスヌード（幅広で大きめのネックウオーマーのようなもの）を持ってきた。衣類を整理して出てきてきたものだ。当初、妻は僕の首回りにどうかと思っていたようだが、購入したばかりの黒い座布団のカバーにならないかあてがってみると、これがまたサイズはもとより色合いもぴったりで、ざっくりしたテクスチャもこの上なく、すっかり気に入った。

何でも取り出してみせるのだな！

と思っていたところである。

つい先ほどまで一緒に衣類の整理の手伝いをしていた和室。もう何年も見てきているので麻痺していたが、あらためて、押入れを開けたその中の様子は・・・ひ・み・つ。

妻が頭で整理した、見た目酷い巣窟だ。

しかし、この巣窟の押入れにしろ乱雑な棚にしろ、そこから欲しいものは何でも取り出してみせる。

だから、我が家のドラえもんのため、片付けなんぞ考えず、そのままにして置いたほうがいい。

そして何と、

その癖がそっくり僕にうつってしまったようで、僕自身の持ち物も、気が付いたら放ったらかしになって、最近はほぼ気にならなくなっている。

今、「終活」こそやらねばならないこの歳で、それで良いのか、何だか解からなくなつた。